

「軽出版」とはなにか？

——「出版」の未来のために



自己紹介

1964年東京生まれ、早大政経卒。文筆家、編集者、大学教員。

今回のプレゼンにかかわる職歴だけを述べると、

- ・日本パーソナルコンピュータソフトウェア協会出版部
- ・ソフトバンク出版部（「月刊PC」）
- ・WIRED日本版編集部
- ・「季刊・本とコンピュータ」編集室
- ・「マガジン航」編集発行人
- ・「破船房」レーベル主宰（房主）

編著書：『いまの生活 電子社会誕生』（晶文社）、『オンライン・マガジンを読み倒す』（HONCO双書）、『再起動せよと雑誌はいう』（京阪神エルマガジン社）、『編集進化論』（フィルムアート社）、『ブックビジネス2.0』（実業之日本社）、『もなかと羊羹——あるいはいかにして私は出版の未来を心配するのをやめて軽出版者になったか。』（破船房、近刊）など。



『再起動せよと雑誌はいう』（2011）

マガジン
[koo!]
FOR THE FUTURE
OF THE BOOK

舟

いまから1年前

軽出版者宣言

2023年10月22日

posted by 仲俣暁生



「軽出版」という言葉があるとき、ふと思いついた。

軽出版とは何か。それは、zineより少しだけ本気で、でも一人出版社ほどには本格的ではない、即興的でカジュアルな本の出し方のことだ。何も新しい言葉をつくらなくても、すでに多くの人がやっていることである。にもかかわらず、私自身にとってはこの言葉の到来は福音だった。

ことの始まりは2023年春の文学フリマ東京36だ。このときの文学フリマで私は、インディ文芸誌『ウィッチンケア』をやっている多田洋一さんのブース「ウィッチンケア書店」に相乗りさせてもらい、自著のコピー本を売るつもりでいた。

ことのはじまりは.....

は軽出版の

is for Light Publishing

方

坪内祐三『みんなみんな逝ってしまった、けれど文学は死なない。』
黒川創『ウィーン近郊』
桐野夏生『日没』
S・グリーンブラット『暴君』
M・アトウッド『獄中シェイクスピア劇団』
郝景芳『1984年に生まれて』
荒川洋治『文学は実学である』
アンナ・バーンズ『ミルクマン』
橋本治『人工島戦記』
リュドミラ・ウリツカヤ『緑の天幕』
宇佐見りん『くるまの娘』
古谷田奈月『フィールダー』
大江健三郎

発行・発売 破船房
定価 800円（税別）

さらに半年前、2023年春の出来事

本書で取り上げた本と作家

オーウェルから、
大江健三郎まで

仲俣 暁 生

破船房 hasenbo

二〇二〇—二〇二三

その後の仁義なき
失われた「文学」を求めて

TRC Event Information

【会場】

東京流通センター
第一展示場・第二展示場

【開催時間】

12:00～17:00
(最終入場 16:55)

【入場料】

1,000 円 (税込)

※当日券販売あり(イープラス/現地券売)
※出店者は出店者入場証で入場可



Literature

Literature

Literature

Literature

Literature

文学フリマ
東京
38マ

2024
05.19
Sun.



協賛: pixiv小説 FUJIFILM 小説家の日 note 小説出版

#文学フリマ東京
#文学フリマで買った本

今年の春の文学フリマ東京で.....

破船房

HASENBO Shipwreck

【破船房の活動について】

破船房は、文筆家・編集者の仲俣暁生による個人出版プロジェクトです。自身による文芸評論をはじめ、思い立ったときにすぐ本を出せる「軽出版」を行うための仕組みとして、2023年春の文学フリマ東京を機会に活動を始めました。販売は基本的に書店への直販とウェブで行います。

文芸誌も小説誌も文芸の新刊書もすべて刊行がストップしたディストピア的世界で、小説家たちはどう生きるか？ 藤谷治さんの短編小説2作をカップリング。
(B6判・64ページ 1000円)



文学フリマ東京 38 に出店します。
つ-01 (第二展示場 F) ウィッチンケア書店内

軽出版物あります。

学生割引・先行
販売購入者割引
あり

1990年代から2000年代初めにかけての橋本治の評論・エッセイを、豊富な引用とともに読み解いた、これからの読者のためのハンディな入門書。
(B6判・80ページ 1500円)



本格的に始動しました。



軽出版の定義と構成要素

出版の生態系における軽出版の位置

1万部以上 文庫・新書・雑誌

(大量生産・大量消費・大量返品)

1000部—1万部 中小版元、ひとり出版社

(直取引、トランスアート方式など多様化)

100—1000部 「軽出版」の領域

(ネット通販・即売会・シェア型書店・直取引)

100部未満 zine、リトルプレスなど

(即売会・ネット通販・限られた店舗での販売)

この領域が「重出版」

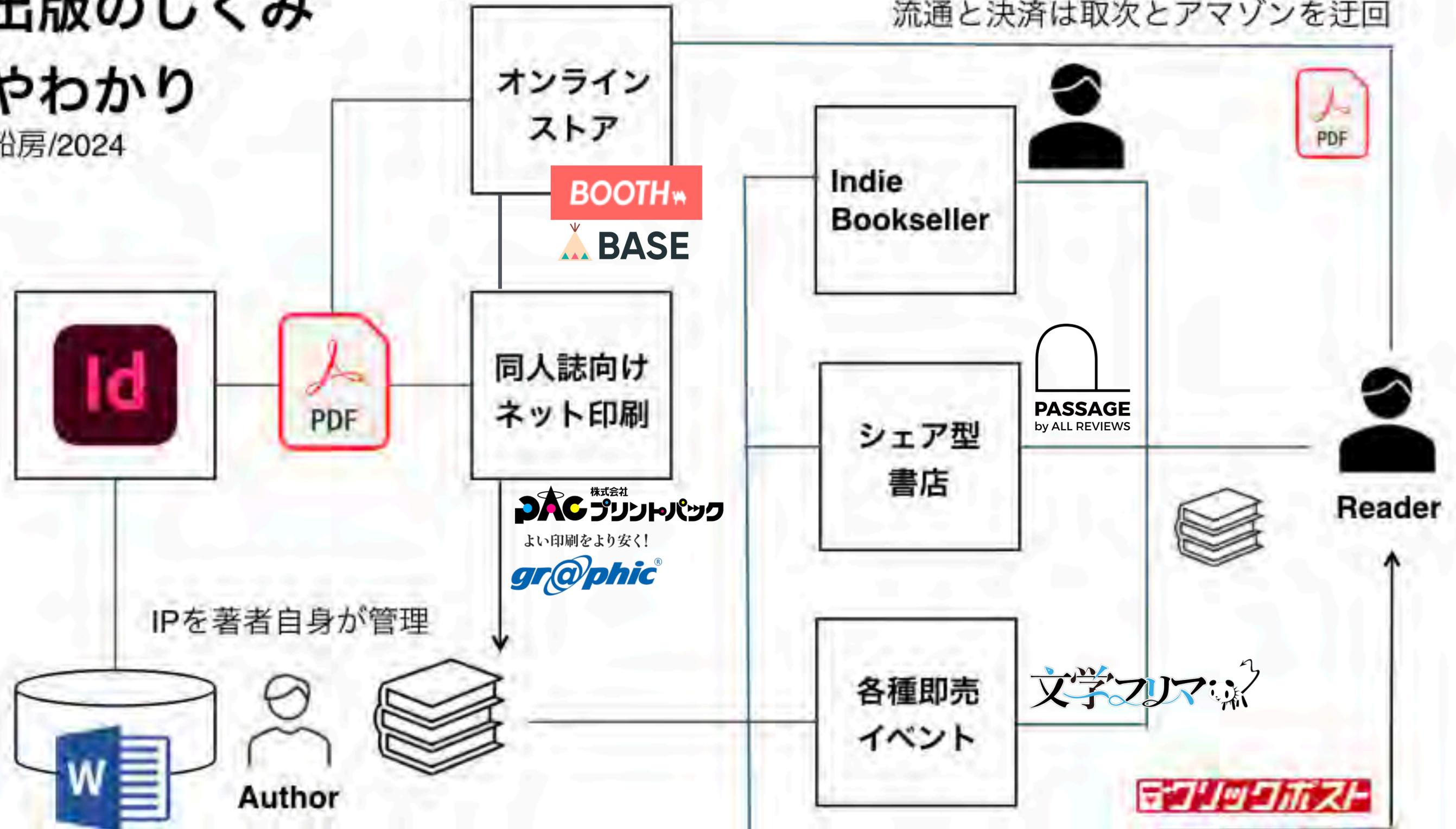
このくらいの部数の本の領域が、意外と見落とされていたのでは？

軽出版のしくみ

はやわかり

©破船房/2024

流通と決済は取次とアマゾンを経由





INFORMATION

【破船房の活動について】

破船房は、文筆家・編集者の仲俣暁生による個人出版プロジェクトです。自身による文芸評論をはじめ、思い立ったときにすぐ本を出せる「軽出版」を行うための仕組みとして、2023年春の文学フリマ東京を機会に活動を始めました。販売は基本的に書店への直販とウェブで行います。関心のある方は破船房のSNS アカウント (X:hasenbo_passage) までご連絡ください。

ITEM LIST



公式サイトはつくらず、オンラインストアとSNSで告知



破船房

HASENBO Shiprock

破船房 (お問い合わせ、ご注文はこちらまで)

press@hasenbo.com

X: @hasenbo_passage or @solar1964

【破船房の活動について】

破船房は、文筆家・編集者の仲俣暁生による個人出版プロジェクトです。自身による文芸評論をはじめ、思い立ったときにすぐ本を出せる「軽出版」を行うための仕組みとして、2023年春の文学フリマ東京を機会に活動を始めました。販売は基本的に書店への直販とウェブで行います。

【新刊のご案内】

仲俣暁生

ポスト・ムラカミの日本文学 [改訂新版]

2002年に刊行され、ながらく絶版だった幻の名著を完全復刊！村上春樹と村上龍はそれまでの日本文学をどのように変えたか。二人の「ムラカミ」に続く世代の作家——保坂和志、阿部和重、町田康、吉田修一、堀江敏幸、星野智幸、赤坂真理はどのように文学を刷新したか。22年前の本なのに、いまもいちばんあたらしい、現代日本文学理解のための最良の副読本。

目次

- はじめに (2002年)
- 第一章 村上春樹と村上龍——70年代後半という時代
- 第二章 「ポップ文学」と「ポストモダン文学」——80年代文学の迷走
- 第三章 保坂和志と阿部和重——90年代前半の「風景」
- 第四章 「J文学」の廃墟を超えて——90年代後半のリアル
- 第五章 21世紀日本文学の行方
- 二十二年後のあとがき (2024年)

◎本書で取り上げられている主要作品

村上春樹『風の歌を聴け』『羊をめぐる冒険』『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』『神の子もたちはみな踊る』、村上龍『限りなく透明に近いブルー』『コインロッカー・ベイビーズ』『愛と幻想のファシズム』、高橋源一郎『さようなら、ギャングたち』『日本文学盛衰史』、保坂和志『プレーンソング』、『この人の闘』、阿部和重『アメリカの夜』、『インディヴィジュアル・プロジェクション』『ニッポニアニッポン』、堀江敏幸『郊外へ』、吉田修一『最後の息子』『パレード』、星野智幸『最後の吐息』『嫩蹄』、高見広春『バトル・ロワイアル』、黒田晶『メイド イン ジャパン』 etc...

破船房

(B6判・136ページ 無線綴じ 2000円+税)

新刊のご案内

「未完」の思想家、橋本治をいま、読み直すために

仲俣暁生

橋本治「再読」ノート



仲俣暁生・著『橋本治「再読」ノート』(B6判・無線綴じ・80ページ)

目次

- はじめに
- 第一章 現代の「キャリバン」たちへ——『浮上せよと活字は言う』
- 第二章 過去を「踏まえ」なければ、未来は訪れない——『江戸にフランス革命を！』
- 第三章 自分の頭で考えることは、なぜ難しいのか——『宗教なんて怖くない！』『貧乏は正しい！』
- 第四章 「天動説」から「地動説」へ——『三島由紀夫』とはなにものだったのか
- 第五章 失われた「友」を求めて——『ぼくたちの近代史』『小林秀雄の恵み』

【破船房の活動について】

破船房は、文筆家・編集者の仲俣暁生による個人出版プロジェクトです。自身による文芸評論をはじめ、思い立ったときにすぐ本を出せる「軽出版」を行うための仕組みとして、2023年春の文学フリマ東京を機会に活動を始めました。販売は基本的に書店への直販とウェブで行います。関心のある方は下記アドレスが SNS アカウントまでご連絡ください。

破船房

HASENBO Shiprock

本件についてのお問い合わせは、破船房 166-0016 東京都杉並区成田西 4-14-11 仲俣暁生 (X: solar1964, anakamata@gmail.com) までお寄せください。

二〇一九年に逝去した作家の橋本治は共著も含めると二〇〇を超える著書あるいは入手困難である。没後一部に復刊・再刊の動きもあればはいえその書店に並ぶ本からだけでは不可能だ。この文章はそうした橋本の旧著を再読し、その思想をあらためて捉え直す多くの古典(『古事記』や『源氏物語』から『ハムレット』まで)に対して橋本自身の著作もいまや「古典」と呼ばれるべき風格を備えている。再読、たびに今日的な意味を投げかけてくれる。私自身が橋本治の読者になったのは一九八〇年代初め、十代の終わりのこのなかには、十分に理解が及ばなかったものもある。これから再読する本の読むものもあるが、そのような旧著からも多くのことが引き出せるはずだ。続けたことの多くが、日本の社会ではまだ少しも実現していないからだ。したがってこの再読ノートの回顧的なものではない。むしろ未来を、つまずくものでもある。

こまめにフライヤーなどを制作して配布

だがその多くは現在、絶版の全体像を見渡すことは、記録である。橋本は今東西や大胆な翻案を行ったが、そうだけでなく、読み返すってリアルタイムで読んだ本十年どころか数十年ぶりに橋本治が終生一貫して主張し何をしたらいいか」を志

破船房

HASENBO Shiprock

未完の思想家・橋本治をいま、読み直すために
橋本治「再読」ノート

reboot

破船房は、文筆家・編集者の仲俣暁生による個人出版プロジェクト。自身による文芸評論をはじめ、思い立ったときにすぐ本を出せる「軽出版」を行う。2023年春の文学フリマ東京を機会に活動を始めました。販売は基本的に書店への直販とウェブで行います。

週刊文春5月30日号の読書日誌で紹介されました！

定価 1400円+税 B6版 80ページ

オンラインストアでのご購入はこちらから▶



ために。

押しグッズづくりも楽しい。



橋本治さんの出版論

「産業となった出版に未来を発見しても仕方がない」



マガジン航に掲載した橋本治さんの追悼記事 (QRコードでリンク)

〈月のはじめに考える-Editor's Note〉

あらためて、「浮上せよ」と活字は言う

2019年2月4日

posted by 仲俣暁生



先月末に小説家の橋本治さんが亡くなられた。謹んでご冥福をお祈りいたします。

小説だけでなく評論やエッセイ、古典の翻案・現代語訳など多彩な本を著した橋本さんには、出版論であり書物論といってもよい著作がある。1993年に雑誌「中央公論」に連載され、翌年に中央公論社から単行本として刊行された『浮上せよと活字は言う』である。

この本の主題は明瞭だ。出版産業がどうなろうと、人間にとって活字による表現や思考が不要になるはずがない。「既存の活字」が現実を捉えられずにいるのなら、その現実が見えている者こそ、その事態を言葉によって把握し思考せよということが書かれている。



平凡社ライブラリー版『[増補] 浮上せよと活字は言う』所収



和菓子が毎日おなじモノを売るように、
自分も日々、テキストを売りたい。

ご清聴ありがとうございました。



破船房の最新刊『もなかと羊羹』10月7日発売
(印刷版・PDF版)

破船房 『ミントと羊羹』 ツアー2024】

『ポスト・ムラカミの日本文学』改訂新版 『もなかと羊羹』 発売記念

《日程、会場等 ★=トークあり、☆=販売のみ》

・10/4 (金) ★JEPA オンラインセミナー「軽出版者宣言」——やっぱり紙だった (アーカイブあり)

<https://jepa.or.jp/seminar/20241004/>

・10/6 (日) ★『ポスト・ムラカミの日本文学』復刊記念トーク (西荻窪・今野書店) w/星野智幸 (小説家)

<https://peatix.com/event/4128993>

・10/19 (土) ☆SHIBUYA BOOK PICNIC (渋谷ヒカリエ)

<https://note.com/liondoev/n/n7289ec9a9d10>

・10/27 (日) ★本の学校 (神保町・専修大学 神田キャンパス) w/竹田信弥 (双子のライオン堂)

<https://honnogakko.or.jp/archives/news/20240923>

・11/2 (土) ★「奥多摩ブックアドベンチャー」 (奥多摩ブックフィールド) w/十七時退勤社ほか

<https://eventregist.com/e/dekNSzEBhs0P>

・12/1 (日) ☆文学フリマ東京39 (東京ビックサイト) w/藤谷治 (小説家)

<https://bunfree.net/event/tokyo39/>

仲俣暁生
ポスト・ムラカミの日本文学 [改訂新版]